

「今日のキリスト、今日のパン」 礼拝に於いて、今日のキリストをどう表すか

坂本 誠

序

本論の主題として与えられたのは「現在ご自分の教会で実践されている礼拝における聖餐を論じ、何故そのような聖餐に至ったのか、福音主義神学の教会が聖餐に対して取り組むべき課題、見落としている点や克服しなければならない点などを論じることで、新たな聖餐の恵みを福音主義教会が享受できること」である。

筆者は、礼拝、特に聖礼典、及び、教会法の二分野の成熟が、福音派教会に必要不可欠だと考えている。教会法が自律的教会に必要不可欠なのは、自分自身で自分自身の信じを行うことを規定し、自ら進んでこれを遵守することこそ自律の意味するところだからである。さらに根本的なことは、教会の生命そのものである礼拝について、教会自らがよく考え、定め、実施していくことである。特に聖書に立脚していることを標榜する教会であるなら、それらしく自らの礼拝を整えることは必然である。それは礼拝が「神と人間との関係の写し」だからである。畢竟、私達にとって必須なのは教会法と礼拝式文の文章作成能力なのである。

礼拝が教会にとって最も重要な働きなのは、アウクスブルグ信仰告白7条が記す教会の二つの印が実行される場だからである。聖書に従って福音が説教され、聖書に従って洗礼と聖餐の二つの礼典が執行されることは、教会の印であ

ると同時に信徒の印であり、牧師職の主要な働きの内容でもある。牧師の職務は説教と聖礼典の執行に尽きるのである。説教に比べて聖礼典の工夫や熱心さはどうか。多くの神学校において説教や説教演習には時間が割かれていても、礼典演習はほとんど行われていないのではないだろうか。聖書主義と言っても、結局、出身教会や先輩牧師を真似ているに過ぎないのではないだろうか。洗礼は感動をもって行われているであろうが、聖餐に関してはさしたる工夫もなく漫然と行われがちだと言えは過言であろうか。それはとりもなおさず、今まで福音派教会では聖餐がなおざりにされ、筆者を含めて牧師自らも聖餐に感動をもってあずかるという経験に乏しいからではないだろうか。

こうした反省の下に、筆者の牧会する教会は、とにかく主日にこの教会に来ればきちんとした礼拝に参与できる教会にしたい願い、そのため礼拝の全体像と各項目を吟味して御言葉の説教と聖礼典が的確に行われるように工夫している。その際、聖書を下敷きにしながら、教会史上、実践された先例に深く敬意を払うことにしている。礼拝は、全世界の教会が2000年にわたり、毎主日、工夫に工夫を重ねて形成してきたものだからである。

I 当教会の礼拝の方針

「その日のキリストを示す」ことを基本方針としている。これは端的に言えば、その日の礼拝のテーマを一つだけに絞り込み、それが明確に示されるようにすることである。礼拝は、第二バチカン公会議典礼憲章10が記すように「教会の活動が目指す頂点であり同時に教会のあらゆる力が流れ出る泉」である。その礼拝の中心にある御言葉と聖餐において、その日のキリスト＝その日のテーマが表現されるように心がけ、そこから教会が力と方向性を得るのである。その他の項目はこの目的のために配置と内容を定めているのである。

重要なことは説教のみならず聖餐においても、その日のキリストを表現することである。御言葉の説教がその日固有のテーマを扱うことは勿論であるが、聖餐もその日固有のテーマを担い、その日のパンその日のキリストの体を提供できるように配慮するのである。いわば、聖餐礼拝のたびごとに、異なる味のするパンを食べることができるようにするのである。パンは毎度、同じ味ではな

いはずである。降誕祭の頃に行う聖餐式と、受難週の頃に行う聖餐式、復活祭の頃に行う聖餐式は違って然るべきではないだろうか。

ハイデルベルグ信仰問答第65問に「信仰のみが、わたしたちを、キリストと、そのすべての恵みに与らせるのであるならば、その信仰はどこからくるのですか」とあり、答は「聖霊が、わたしたちの心の中に、聖なる福音の説教によって、信仰を起し、それを、聖礼典を用いることによって、確認してくださるのです」である。説教で語られたことが聖礼典によって確認されるという仕組みである。説教の内容は毎回変わり、そのことに説教者は腐心するのだが、説教の内容は果たして聖礼典に反映され確認されているだろうか。毎度、式文の棒読みではその日の説教が聖餐に連結されないのではないだろうか。同第67問には「それでは、御言葉と聖礼典は、二つながら、わたしたちの信仰に、わたしたちの救いの唯一の根拠として、十字架のイエス・キリストの犠牲を指し示す、ということに向けられているのでしょうか」答「もちろんです。わたしたちの救いの全体が、十字架でわたしたちのためになされた、キリストの唯一の犠牲に基づいているということ、聖霊は、福音において教え、聖礼典において確認し給うからです」とあり、御言葉と聖礼典が、二つながら両者相俟って同一の目的を目指し、教えられた事柄が確認されると言われている。言葉をもって啓示された事がパンの下に提供され、それを食べ飲むという生々しい行為によって、腑に落ちるものになるのである。御言葉のみの一頭立て馬車よりも御言葉と聖餐の二頭立て馬車の方が、より馬力があり強力であるに違いない。私達の礼拝で欠けていることは、説教と聖餐が乖離している点にあり、これは大変、惜しい事態なのである。

II パンの区別

その日のキリストを示すためには、パンに区別を設ける必要がある。1コリント11:29には、我が身を吟味することに加えて「みからだをわきまえないで飲み食いする」とある。わきまえる＝ディアクリノウは間を分けて検分し、区別をつけることである。自己の吟味と主の体の検分の二つが要請されていると読める。

区別には二段階ある。第一の区別は、通常のパンと聖餐のパンの区別である。第二の区別は、他日の礼拝で食したパンと、今日の礼拝で食すパンの区別である。

A 第一の区別

通常のパンと聖餐のパンの区別については、聖餐論争で語り尽くされてきた。全実体変化説とそれに対抗する宗教改革者たちの諸説は本稿では扱わない。区別の付け方として、聖霊の働きによるのか御言葉の働きによるのか、祈願によるのか聖書朗読によるのか、奉献奉挙などが必要なのか、質料形相と言う考え方が良いのかどうか、キリストの人性における体は遍在なのか偏在なのか、物素の形相が残っている間なのか礼拝の時間内場所内なのかと言った議論があることはよく知られている。区別がどのようにして起こるのかの説明は異なっているにしても、いずれの説でも、最低限、通常の食用のパンと聖餐用のパンの間には何らかの区別を設けることは認めている。主が奉納されたパンと杯を「取り」且つ「これは」と仰せになったということは、手に取ったパンと杯は手に取らなかったものとは異なった扱いをされたということである。つまり、手に取った物の、他の物からの分離と特定が同時に起こったのである。主は、その手に取ったところの区別された物＝分離と特定を経た物を差し出しつつ「これを取って食べ、飲め」「私を覚えるためにはこの方法で行え」とお命じになられたのであった。

私達も、我が家の食卓上に置かれたパンと、祈りなり聖句なりを経て牧師の手から渡されたパンを何らかの意味で区別し、何かが違っており、両者は混同されてはならないという心持ちになる。この「何かが違っていている」ということをまずは認めなくてはならないのである。分かるとは分けることである。どこがどのように、何故、違うのかを説明することが肝要である。もし、区別や違いを認めないということになれば、聖餐式の場において、聖書朗読や祈りを経て牧師の手から差し出されたパンと、その日の朝食で食べたサンドイッチとは何の違いもないことになる。極論すれば、配餐されたパンを食べず、自分で昼食用に購入したコンビニのパンをかじっても良いことになるであろう。聖餐と愛餐の間の混濁も生じて来るであろう。いずれにしても、何らかの意味で、通

常の食用のパンと聖餐式用のパンの間には区別があることは認めているであろう。何かが違うのであり、違っていなくてはならず、違っていているということは、聖なる畏れと深い関係があると言えよう。

世の中には無数のパンが存在するが、大別すれば、通常のパンとキリストの体であるパンの二つになる。全実体変化説によれば、1・通常のパンとは、質料も形相も共にパンであるパン。2・キリストの体であるパンとは、質料は歴史的事実としてのキリストの体そのものであるが、形相はパンのままであるパンである。そのため、意向においては、本来はキリストの意向を深く弁えてこれを執行し且つ受領すべきであり「これがキリストの望みだ」というところまで求めるべきだが、実際はそこまでは求めず「これは教会で行っていることだ」ということで足り、最低限「このパンは通常のパンとは違う」と分かればよいのである。これは消去法による。世の中には二種類のパンしかないのだから、通常のパンとは違うと分かれば、結局、上記2が残るのである。

当教会では「命のパン、救いの杯として聖別してください」と、一応、聖別という文言を祈祷に入れている。これは全実体変化説に依拠してのことではない。ここで言う聖別は「使用目的の限定、用途限定」を意味している。この祈りを教会挙げて祈った以上、この聖卓に供えられたパンと杯は「キリストを記念するために食し、飲む」こと以外には使用せず、ひたすらこの目的のために限定的に使用するのである。従って、聖餐後に物が残ってしまった場合、牧師が全て飲食し消費している。

普通のパンと聖餐のパンの違いは様々な方法で認識される。「これは」は何を意味しているのだろうか。「どれが」「これは」として扱われるのだろうか。筆者は聖餐式の四行動「取り、感謝し、割き、与える」を重んじて「パンを取り」と言った時には実際にパンを取り、「割き」と言った時には実際にパンを割くようにしている。こうして、このパンが普通のパンとは異なるもので、区別すべき物だということを表現している。スコラ的には「これ」には色々議論がある。物と言葉の一致が問われ、物理的な一致、時間的な一致、認識の一致などが指摘される。物理的とはパンと杯の置かれた位置の問題である。「これ」と客観的に言えるには通常、聖卓の上に置かれたものを指すであろう。聖餐式の際に別室に置かれていたものは「あれ」「それ」であって「これ」ではない。時間

的とは昨日ここに置いてあったとか、明日ここに置かれるであろう、今ここにない物は「これ」ではないと言った問題である。また、司式者の認識の問題もあり、落下していたのに気付いていなかった場合などが該当する。このような議論は些末拘泥主義の観があるが、現実には追加資料の問題に関わってくる。聖餐式でいざパンを配ろうとした時にパンが不足していた場合、パンを追加しなくてはならないが、その際の扱いはどうすべきなのであろうか。筆者は「あれ、それ」の場にあった物を使用する場合には、再度、制定文を読むべきだと考える。卓上に置かれていたのであるならそれは必要がなくなる。

B 第二の区別

他日の礼拝で食したパンと、今日の礼拝で食すパンの区別については本稿の目的とするところである。あの日のパンとこの日のパンは、同じキリスト、同じパンであっても異なるものであり、同じ味がしないはずである。2テモテ2:8「ダビデの子孫として生まれ、死者の中からよみがえったイエス・キリストを、いつも思って（アナムネオー）いなさい」とあるように、主の死を告げ知らせるにしても、十字架とだけ言うのではなく、誕生、復活、昇天、臨在、再臨との関係で考えていくのである。その違いを示すためには、聖餐前部である御言葉の部の構成を考えること、そして聖餐の部との間を結ぶ方法を考えることになる。

全実体変化説に立つカトリックにおいても、形相が変化しない以上、聖変化前のパンと後のパンは司祭にも判別がつかない。両者を混ぜてしまえば選択することはできないのである。その違いはその礼拝に集い、聖餐に与ろうとする会衆の態度や表情によってしか判別できない。そして、その違いはパンの前にある、主の救いの物語によって、つまり御言葉の説教によってのみ生じるのである。

今日、存在論が衰退したこともあり、トマスやアリストテレスによる説明はカトリックでも余りされなくなっている。今日では、エドヴァルト・スキレベークスやペーター・ショーネンベルクらの「しるしの意味変化説 transsignificatio」や「目的変化説 transfinalisatio」などによる説明がなされつつある。これらの説は、キリストの賜物＝キリストの自己譲渡は、信仰者に向け

られているのであるから、パンは人間との関係性において意味や性質が決まるというものである。これは、テレビの「開運！何でも鑑定団」に似ている。この番組の面白いところは、一見こんなガラクタと思えるものに意外な価値がつくという点である。「何々にゆかりの品」と言って付加価値が付くことはよくあることであろう。例えば、ここに一足の靴があり、筆者が普段履いている靴であれば誰もそのような物を買わない。しかし、長島茂雄が巨人軍に入団した最初の年に、最初のホームランを打った時に履いていた靴だということになれば百万円以上などの値がつくかもしれない。あるいは、その辺に咲いている小さなタンポポ一輪にしても筆者が花売りになって「買ってこれ」と言ってもそんなゴミは誰も買わない。しかし、女の子が、病院で長く療養しているお母さんにそのタンポポをプレゼントし「お母さん、早くよくなってね。お母さんのこと大好き」と言って渡したとしたらどうだろうか。それは、お母さんにとっては何物にも代えがたい大きな価値を持つものに変化し、それをゴミ扱いにせず箱に投ずることはできないであろう。つまり、物の価値は単にそれ自体では決まらず、1・愛の有無、2・誰が誰にという人間関係、3・それにまつわる物語などによって決まるのである。同様に、パンやぶどう酒の価値も、主と人間、それにまつわるストーリーによって決まるのである。パン一切れは僅かな値段であろうが、説教を通してそこにこめられたキリストの自己譲渡の物語が加われば、そのパンは無限の価値を持つ物に変化していくのである。以下、その日のパンを示すために、礼拝全体の道具立てをどのように行っているのかを説明する。

III 当教会の礼拝の梗概

当教会の礼拝は四部構成になっている。四部構成で考えるのは、ローマ式ミサの構造を参考にしている。即ち、1・開会、2・御言葉、3・聖餐、4・閉会の四部である。招かれたので集い、語られたので聞き、差し出されたので食し、祝福を受けたので出立するという構造である。2・御言葉と3・聖餐が礼拝のクライマックスであり、前後の1と4は、2と3を盛り立て、余韻を深めるために配置されるのである。